



# エクランドWakakoのアメリカ便り

新生児医療の現場から

**エクランドWakako** 高校卒業の2年後に渡米。1991年にBSN（看護学学士）を取得。その後CCU、ICU、NICUでの勤務を経て2002年に新生児医療専門分野でMSN（看護学修士）を取得しNNPの資格試験に合格。現在、新生児医療専門グループの一員として、市内の複数の病院でNICU専門医療に携わっている。

from  
USA

## 4 死別時の家族へのケア 最後のぬくもり

### 亡き息子を思う伯母の手記から

一度も親に抱かれもせず、名前すらも直接呼ばれもしないで逝ってしまった息子ではあったが、一人っ子の上の息子をお兄ちゃんにしてくれた。精神的に兄貴になった上の子が、逝ってしまったあの子の分もたくましく生きていくようにと願わずにはいられない。

1971年5月6日 中田幸子

これは私の伯母がその息子、幸司の幼稚園の園誌に残した「精神的兄貴」と題した手記の一部です。当時5歳だった私も元気になったらきっと会いに行こうと言いながら、結局会うことができず大変悲しく思ったことをはっきりと記憶しています。「裕司ちゃんは腸に穴が開いてしまったのよ」という私の母の説明に、保育器にひとりで寝ている赤ちゃんのおなかの中にとぐろを巻いたような腸があり、それに穴が所々開いたものを頭に描いたのです。そのイメージを持ったまま私は大人になりました。NECについて初めて学んだときは「これだったんだ、裕司ちゃんが亡くなった原因は」とやっと理解できた気持ちでした。

34週で生まれた裕司ちゃんが一度も母親に抱かれることなく、59日間を保育器で寂しく過ごしたということは、今のNICUで働いている私たちにとっては考えられないことです。当時6歳だった幸司は、弟のことを59日間待ちわびて、結局、兄になったということを体で経験するに至りませんでした。伯母の手記からは、母親なら誰でも感じる、「触れたい、抱きたい」という気持ちが満たされなかった苦悩と、一人っ子の幸司の「悲しみのプロセス」のために胸を痛めていた様子が伝わってきます。また、伯母はこうも記しています。

幼稚園から元気に帰ってきた息子を待っていたのは、弟の悲しいニュースであった。幸司は「まさか」と一言。「こんなことで嘘は言わないよ」と涙する父に悲しい現実を知らされた。「裕ちゃん、亡くなってしまって本当にかわいそうなおことをしたわよ

ね」と話す私の前でみるみる涙をためていく幸司に、私は機を転じさせるために別の話題を持ち出し、きわめて明るく振る舞った。「僕の夢はパーになっちゃった」と幸司は言った。また、後日お手伝いのお姉さんに「僕、こんなに悲しい思いをしたのは初めてだよ」と言ったという。「裕ちゃん、おはよう」「裕ちゃん、ただいま」。声をかける息子の姿にやるせなさを禁じ得ない。

## 悲しみから心が癒される過程

今、40歳近くになって元気な男の子2人の父親になっている幸司は、数年前自分の次男の出産の場所として裕司ちゃんが入院していた病院を選んだのでした。それを聞いたとき、締めくくりができていなかった幸司の気持ちの一部が息子の誕生を通して、きっと温かいもので包まれたであろうことを願わずにはいられませんでした。

幸子伯母は、1985年に55歳の若さで癌のため亡くなりました。1958年ごろ、まだ20代後半で独身だった彼女は、英国で児童福祉や社会福祉を学んでいました。結婚して母親になってからの彼女の生涯をみると、その後の一生を費やして、日本初のボランティア協会の推進・創立・運営に努めるなど、福祉を実践で追求した法律家でした。当時「人一倍、生きる努力を積み重ね、報い少ない身障者を思う」と詠んだ彼女の心の奥には、子どもを亡くした悲しみを情熱的なエネルギーにかえて、一人の人間が生きるということの価値を人一倍認識していたことをうかがわせます。

「抱いてやれなかった」悔しさは、きっと彼女の心に最後まであったのではないかと思います。亡くなる赤ちゃんとその家族のお世話をさせていただく機会があるごとに、伯母家族の悲しい体験を無駄にするものかと、私の中で熱いものがこみ上げてくるのを感じます。今回は、そんなある日の家族のお別れについてお話ししましょう。

## Bereavement Care委員の一員として

NNPになる5年前のことです。スタッフナースとして夜勤の12時間勤務をしていた私は、夕方、NICUのドアの前のアサインメント（担当患者）の書かれているボードに目を通しました。急性期とステップダウンのNICUベッド数あわせて50ほどの大学病院でのことです。そこへその日のチャージナースが来て一言、「ごめんね、あんまりいい受け持ちじゃないけど、あなたは Bereavement 委員のメンバーだと思って」と言います。このNICUには死別時のケアを充実させるための委員会があり、私はその一員でした。

私の担当はHFOをつけたベビーで、胎内で感染症を起こしたことが原因となり、胎児

水腫を持って生まれた子でした。浮腫がひどく肝臓も脾臓も重度の肥大が認められ、腎臓はまったく機能していませんでした。点滴のポンプがずらっと並んだベッドサイドで、細かなレポートをもらって引き継ぎをします。さまざまな検査結果には正常な値がまったくないという状態で、HFOを使ってもHypoxiaもアシドーシスも改善が見られないのでした。肺の発達が妨げられてとても小さいうえ、重症の浮腫のためさらに肺が圧迫されていました。心臓機能は点滴によってどうにか保たれていましたが、血圧はぎりぎりの状態。DICも併発しかけていて血小板、FFPの重なる投与にもかかわらず、じわじわと出血が見られ、先が長くないのは誰の目にも明らかだったのです。

当時のNICUのNeoたちは、現実的にQuality of Lifeを重視していたため、ただ単に誰にでも延命措置を施す方針ではありませんでした。しかし、生命倫理の観点からもこの赤ちゃんのケースは特異なものがありました。23歳の母親には心臓肥大の症状があり、それに妊娠中毒症も重なって心筋梗塞で倒れたのです。ERへ運びこまれ、蘇生の後すぐに緊急帝王切開が行われました。私が児のケアを引き継いだときは、かなりの重体でCCUに運ばれ、意識がはっきりしない状態でした。つまりその母親は、倒れてから緊急帝王切開があったことも、NICUに自分の子どもがいることも、その時点では知らなかったのです。

「できれば温かいベビーを抱かせてあげたい」との思いで、治療スタッフは母親の意識

---

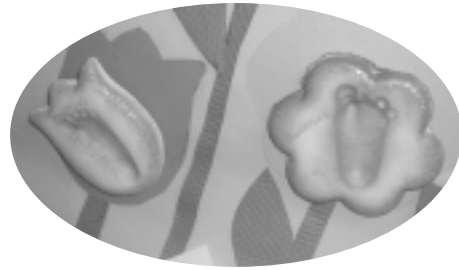
**ボランティア協会**▶1981年世田谷区に創立された。老人福祉法、生活保護法、児童福祉法で定められた人びとの権利を、地域レベルでサポートしていくための公私共同の組織としては全国初めてのボランティア組織。伯母は専修大学の教授として民法を教えるかたわら、この協会の理事長を務めた。

**Bereavement Care**▶グリーフケア。赤ちゃんとの死別に関するすべてのケアを含む。親たちへの心のケアであり、高い水準のコミュニケーション能力を必要とする。Bereavement Care委員は、亡くなった赤ちゃんのために、さまざまなサイズの服や、最後に抱いてもらうときに使うブランケットなどを用意しておく。思い出の品として持って帰ってもらうことを前提に、身の回りのものだけでなく足型などもとる。粘土のようなものを使って立体的に足と手の型を残し、乾く前に児の名前を刻み入れたりする方法もよく使われている（次ページに写真）。

**ステップダウン**▶急性期を過ぎた児が移されるユニット。大体は急性期の患者1～2人につき看護師1人だが、ステップダウンになると患者3～4人につき看護師1人の割合。

**Neonatologist**▶新生児専門医。米国のNICUで主治医になるための資格。医学部卒業後、まず小児科医のレジデント（研修医）として3年間訓練して小児科医専門試験に合格し、さらにNICUで丸3年間主治医の指導を受けてはじめて資格試験の受験資格が与えられる。資格取得後も、更新のために7年ごとに試験を受けなければならない。

---



Centennial Medical Centerにある、赤ちゃんの足跡で飾られた壁

が戻ることを願って延命努力をしていました。ちょうどそんなとき、私の勤務が始まったのでした。2時間後にCCUから連絡が入り母親の意識が戻ってきたこと、母親以外の家族は状況をざっと把握しており、みな、この赤ちゃんの延命を必ずしも望んでいないこと、そして母親は医師たちの話を聞けるだけの意識があり、延命をするかしないかの決定をしたいと言っていることが伝えられました。すぐにNeoとNNPが状況説明にCCUへ降りていったのですが、母親の悲しみは想像以上のものでした。事情を説明し、母親の合意を得てからベビーへの蘇生努力を停止しました。ベンチレーターから外して、ベビーを連れてきますよというこちらの誘いに母親は同意し、お別れすることになりました。

## 最後のお別れのためにできること

私と2～3人のナースが大急ぎで、ベビーを運ぶためのきれいなバスケットを用意しました。NICUからCCUへは裏通路がなく、一般の通路を使って亡くなった赤ちゃんを移動させるのです。ピクニックバスケットのようなふたのあるものにベッドを作り、小さいマットを敷いた周りにぬいぐるみと一緒にベビーを丁寧に包んで寝かせました。こういうときのためにさまざまなブランケットやぬいぐるみ、リボンなどをBereavement委員が用意していました。やさしい色の帽子やベビー服もいろいろなサイズを揃えていました。地元の教会の婦人会などが超低出生体重児にも合うサイズの手作りのかわいらしい服や帽子を寄付してくださっていて、そういったものも使わせてもらっていました。

ベビーの点滴の針や挿管していた気管内チューブを取り除きます。綿を鼻に詰めて、最初であり最後である対面がショックで終わらないように気を配りました。ベンチレーターから外してすぐならまだ体が温かく、そのときに親に抱かせてあげたかったです。冷たい赤ちゃんの記憶は肌に一生凍りついたように残ってしまうものです。死別という悲しい

## エクランドWakakoのアメリカ便り



ステップダウンユニットでCentennial Medical CenterのNICUナースたちと。みんなが着ているユニフォームは、各人で好きなものを選び、模様も色も個性にあふれている

Sinusリズムの合間に顔を出しています。心配そうな家族が周りに座っていました。私が入っていくと、みんなの静かな目がじっと私が持っていったバスケットへ向いたのです。

優しく母親に言葉をかけながらそっとベビーを抱き上げると、母親の胸を少しはだけさせて、子どもの体温が感じられるように、ベビーの上半身の素肌を直接母親の胸に触れさせました。母親は涙をいっぱいためて、ただじっとわが子の顔を見ています。持ってきたポラロイドカメラで、抱いている母親と赤ちゃんの顔をファインダーいっぱいにおさめました。私は母親の手を赤ちゃんの顔にそっと添えると、「いつまでも抱いていていいからいっぱいお話してあげてね」と言い、家族が落ち着いた様子なのを確かめて、静かに部屋を出ました。NICUのチャージナースにしばらくここで待ちますからと伝えると、私はCCUのナースステーションでこの母親を担当しているナースに会いました。以前、CCUに勤務していたころと一緒に働いたことのあるナースだったということもあり、どっとあふれる涙をおさえることができなかったのを思い出します。

フローシートを持ってきていたので、CCUのナースステーションでそのときの様子を記録しながら20分ぐらい待ったでしょうか……家族の1人が出てきて、「十分に抱かせてもらいました。ありがとう」と言いました。母親も体力を使い果たしたようです。私は母親に「これからもっときれいにして写真をたくさん撮っておきますから」と言うと、きれいにベビーをブランケットにくるみ直して、ふたたびバスケットに寝かせました。抱かれていたのでまだ温かみが残っていましたが、肌の色は変わり始めていました。そのとき、「ああ、温かい赤ちゃんを抱いてもらえた。天国への旅立ちは一人ぼっちじゃなかったんだ」と思えたのです。母親は手を伸ばして名残惜しそうに子どもの顔に触れ、“I love you”と言うと疲れきったように目を閉じました。

出来事のうち、赤ちゃんを抱くという一番大切な体験が少しでも温かい思い出として残るようにとみんな願ったのです。

CCUに入るとすぐに、母親自身がまだまだ厳しい状態であることがわかりました。カテーテルが首の辺りから入っているのが見えます。いくつもの点滴が下がっていて、モニタを見るとPVC（心室性期外収縮）がときどき

## 思い出を残すこと

NICUに戻ると、服を着せてフリルとリボンのついた帽子をかぶせ、写真を何枚か撮りました。写真を撮ることが好きな私は、少しでも赤ちゃんがきれいに写るように柔らかな色合いのブランケットや、小さなぬいぐるみなどでベッドを飾りました。それが終わると、サテン張りの“思い出の箱”に撮った写真や、そのときに使った服、ブランケットをすべて入れます。髪の毛も少し切って小さい封筒に入れます。ベッドサイドで赤ちゃんのために使ったものは、すべて持って帰ってもらえるようにきちんと整理しました。手と足の型を思い出のカードにきちんと取っておくのも大切な仕事です。悲しい作業ですが、私は思い出のもの一つ手もとにないまま悲しい経験をした伯母のことを思い出すのです。このケースでは上の子どもさんはいませんでした。きょうだいがいる場合には、できれば亡くなってしまいう前に親の判断で赤ちゃんに触れさせてあげるといふ努力もしています。子どもであるからこそ、お兄ちゃんになった、また、お姉ちゃんになったという実感は、想像ではなかなか得ることができないからです。

## 最後のぬくもり

この原稿を書いている今も、元気になって退院する家族たちのいる同じ空間に、亡くなってゆく赤ちゃんを抱いて最後のお別れをすべく両親がいらっしやいます。Griefは個人個人でプロセスが違って当然です。個人の過去の体験、性格、育った環境などのさまざまな要因が、悲しみの真っ只中にいる一人ひとりの心のDynamics（精神心理学的な心の力学、心の営み）に、多大な影響を与えることは誰も否めない事実だと思えます。けれど、どのように短い命でもその存在が大変貴重な事実であると体で実感できなければ、本当の意味で悲しみを乗り越えるというプロセスにたどり着くのは難しいのではないのでしょうか。

子どもと死別されたさまざまな親のケアをした経験から、このような悲しい経験でも、子どもは親に何か温かいものを残していつてくれるのだと教えられました。ご両親たちから「こころのこもったケアをありがとう」といった便りが送られてくるときに、多くの方たちが、最後に温かい赤ちゃんを抱いた一瞬を絶えず心の中の宝物としていらっしやることを知らされ、将来、家族が悲しみでつぶされてしまいそうになるとき、思い出の箱を開けて少しでも亡くした子の存在を実感することで、最後のぬくもりをもう一度体験していただければと祈る気持ちです。